

書 評

『小室直樹の中国原論』について

— 日中比較文化論の視点から —

藤 田 昌 志

Book Review On KOMURO Naoki's *The Principles Of China*

FUJITA Masashi

キーワード：共同体、幫、宗族、法概念、契約

序

本稿では日本で市販された日中比較文化論関係の本を紹介したいと思う。日本人著者の手になるものであるが、印象に強く残ったのでここで取りあげたい。最近、日本で出版された日中比較文化論関係の本は中国人の手になるものが圧倒的に多い（たとえば、孔健、莫邦富、黄文雄等）のであるが、それについては稿を改めて、論文の形にしてまとめたいと思う。本稿では次の本について書評を書くことにする。

小室直樹著（1996）『小室直樹の中国原論』徳間書店

「中国原論」となっているが、内容は比較文化論的なものであるから取りあげたことを付言しておく。

一、日中比較文化論について

前置きが長くなるが、日中比較文化論についての著者の視点、スタンスについて少し述べてみたい。筆者は外国語を専門とする大学で中国語を専攻し、国立国語研究所の日本語教育長期専門研修（期間一年）を受けた後、日本語教育の世界に7年ほど身をおいた。その間、日本政府受け入れの海外技術研修員や私費留学生に日本語教育を行い、専門分野別の日本語教科書を作りもした。その後、大学院で中国語、中国文学、日中比較文学を専攻し後期博士課程まで進み、単位取得の後、非常勤講師（日本語、中国語）生活を5年ほど送り、現職について2年あまりになる。私の中国語・中国並びに日本語・日本についての研究（日中対照表現論、日中比較文学論、中国現代文学論、日中比較文化論等）を振り返ってみると、それぞれの分野についての個別研究は自分なりに満足のいく形で行ってく

ることができたと思う。又、体系性についても考慮してきたつもりである（たとえば、一連の日中対照表現論）。ただ、筆者の根底には日本（並びに日本語）から中国（並びに中国語）を見るとともに中国（並びに中国語）から日本（並びに日本語）を見ることによって両国（並びに両言語）のよりリアルな姿が浮かび上がってくるのではないかという考えがある。そのため、従来の個別的、原子論的専門研究の枠からはみ出た部分があるのは否めない。しかし、こうした研究もあり得るということを筆者は証明したい。とりわけ、国際化、国際化と声高に叫ばれる時代には一方向だけの研究ではなく双方向の研究が要請されるのではないか。又、日本にいる中国人留学生数が全留学生数の40%を超え⁽¹⁾、2万人以上が日本に現在、滞在している現状に鑑みれば、研究も新しい状況に対応するものでなければならない。我々はその中国人留学生に中国から見た日本についての印象を直接、聞くこともその気になればできる状況にいる。又、日本における中国語教育にしてもそうした中国人留学生（ネイティブ・スピーカー）と連携していく中で、生き生きとした中国語を学ぶ機会を日本人中国語学習者に提供し、はじめの発音の段階で日本人学習者の多くが脱落してしまうような従前の中国語教育を乗り越えていく道が開けるのではないだろうか。

翻って、外国理解の基本は語学であることは言をまたない。日本語教育というと、何か50年以上前の皇民化教育のようなエトス（＝基礎的な精神的雰囲気）を彷彿させると思う日本人もいるであろうが、自国の文化、言語の良質な部分を再認識し、尊重し、外国に発信しないで何が国際化か。もちろん、外国人に日本語を強制するのではなく、日本語を勉強したい人、必要とする人にだけ教えるという大前提はある。更に言えば、言い古されたことであるが言葉の学習だけではだめである。又、そもそも厳密な意味で言葉だけの学習というものは存在せず、異文化理解と外国語の習得はワンセットのものである。外国語を学びつつその国の文化（衣、食、住、つきあいの仕方等）についても深く知悉していく必要がある。そうしたことを考えれば、前述の日本人への中国語教育だけでなく、中国人（正確には中国語を母語とする者／日本人についても同じ）への日本語教育も広く日本文化への理解と一体のものであるはずである。その双方向（日本から中国へ、中国から日本へという双方向）を考察していく中に新しい日中比較文化論の地平が広がるのではないか、というのが私の基本的な考えである。

以上のような双方向としての日中比較文化論（他の人に同様な双方向の『日○（○にはほかの民族、国家、文化集合体が入る）比較文化論』を研究してもらいたい。）を目論む筆者が前述の本を本稿で紹介することには「日本（人）から見た中国」のサンプルを提示する意味がある。小室直樹氏は碩学である。それに各論だけでなく総論的に物事の要所をとらえていく能力が極めて高い方と拝察する。日中比較文化論に必要なのはそうした鳥観

的なセンスであろう。（もちろん、資料にあたり、それを地道に丹念に読んでいく作業も必要である。）以上、少し長くなったが本書評、紹介の意義に関連することから、筆者の日中比較文化論についての考えを述べた。次に、本題に入ることにする。

二、小室直樹著（1996）『小室直樹の中国原論』について

小室直樹氏の略歴は同書の奥付上にあるとおりである。

小室直樹（こむろ・なおき）1932年東京生まれ。京都大学理学部数学科卒。大阪大学大学院経済学研究科中退、東京大学大学院法学政治研究科修了。マサチューセッツ工科大学、ミシガン大学、ハーバード大学に留学。1972年東京大学から法学博士号を授与される。著書『ソビエト帝国の崩壊』『韓国の悲劇』（以下省略）他他数。

時々、奇異な発言もするが並々ならぬ才能を持つ^{かた}方と考える。鬼才、小室直樹が元来、専門ではない中国とがっぷり四つに組んでできあがったのが本書である。

本書の構成は以下のものである。

- 第一章 ● 中国理解の鍵は「^{ほう}帮」にあり
- 第二章 ● 「帮」を取り巻く多重世界
- 第三章 ● 中国共同体のタテ糸「宗族」
- 第四章 ● 中国人意識の源流に韓非子あり
- 第五章 ● 中国の最高聖典、それが「歴史」
- 第六章 ● 中国の市場経済はどうなっているか

端的に言えば小室直樹氏の中国理解のキーワードは「帮」と「^{そうぞく}宗族」に尽きる。次に、そのことを念頭に置いて章別に内容を見ていこう。

二-①第一章 中国理解の鍵は「帮」にあり

第一章では「中国人は絶対に信用できると同時に少しも信用できない」という命題にこそ中国理解の第一の鍵があるとする。小室氏によると「帮」の関係を結べば「中国人は絶対信用できる」が「帮」の関係を結べないなら「少しも信用できない」。ではその「帮」とは何かというと『三国志』の劉備、関羽、張飛の三人が桃園で結んだ義盟のような絆のことであり、「利害、争いから完全に自由であり、絶対に信頼でき、完全に理解しあい、そして生死を共にする」関係を指して言う。それに反して「帮」外の間人間関係は「一言でこれを言うと——。何をしてもよろしい。窃盗強盗ほしいまま。略奪（中略）虐殺・・・

何をやっても少しもかまわない」といったものであると小室氏は言う。「倫理・道徳は自分たちの集団の中にだけ存在するのであって、集団の外には存在しない。いや、正確に言うと、倫理・道徳は集団の内と外では、全くちがったものとなる。」つまり「^{ダブルノルム}二重基準 (double norm)」となるのである。マックス・ウェーバーは共同体 (Gemeinde, Commune) の特徴として—— 1) ^{ダブルノルム}二重規範を有する (内の規範と外の規範とはちがう) (2)社会財の二重配分 (社会財はまず当該共同体に配分され、そのうえで共同体内の各メンバーに再配分される) (3)共同体内の主な情緒は^{けいけん}敬虔さ (Pietat, piety) である。——の三つを挙げているが (p. 169) 中国の「幫」は共同体を作っていると小室氏は言う。

続いて、『史記』第二六「刺客列伝」の挙げている^{そうかい}曹沫、^{せんしよ}専諸、^{よじょう}予讓、^{しやうせい}聶政、^{けいか}荊軻、^{こう}漸離の六人の刺客のうち、予讓、聶政の二人を取りあげて「幫」の具体的姿を明らかにしている。

予讓は晋の人で^{ちはく}智伯に仕えたが、^{ちやうじやうし}趙襄子が智伯を攻め滅ぼしたため、旧主智伯の仇をうとうとする。予讓は何度も殺そうとつけねらうがいつも失敗に終わる。趙襄子は智伯を捕まえて尋ねる。「お前は以前、^{はんし}范氏や^{ちやうこうし}中行氏にも仕えた。智伯は両氏を滅ぼしたのにお前は両氏のために仇討ちをせず、かえって智伯に仕えた。おかしいではないか？」予讓答えて曰く「たしかに私は范氏にも中行氏にも仕えたが二氏は私を普通に待遇しただけだ。だから、私も普通に義務をつくしたにすぎない。しかし、智伯は私を国土 (一国で特に傑出した人物) として待遇してくださった。だから、私も国土としての義務を果たすのだ。」趙襄子「お前が智伯につくす忠義の名分は充分に立った。」予讓は「忠義の名分を立て」という目的を果たして、満足して自決した。

このストーリーをまとめて小室氏は言う。「国土待遇とは待遇の最高である。これほどの待遇を与えられれば、最高の人間関係が発生する。智伯と予讓とのあいだには二人幫が形成されるのである。」と。中国人のリアリズム (現実主義) とはこうしたものを言うのであろう。具体的なのである。日本人のようにムードでは動かない。日本人が「中国人は信義に厚い」と言うのは幫の成立した状況で初めて言えることである。

もう一人の聶政のストーリーは以下のようなものである。

人を殺した聶政は仇討ちを避け、母や姉と^{せい}齊へ行き^{いぬ}狗の屠殺を業としていた。ある日、立派な人物がやって来た。その人は^{げんすい}嚴遂といい、元、韓の大臣で、韓の首相^{きやうり}俠累と剣で斬り結ぶほどの大ゲンカをしたために死刑にされる恐れがあるので出奔して齊に来ていた。そして、俠累韓首相に報復してくれる人物を探しており、聶政のと

ころへやって来たのである。元大臣、嚴遂は何度も一下層民聶政の家を訪れ、やっと聶政に会える。酒宴を開いて、大金を贈ろうとし、聶政の母の長寿を祝った。しかし、聶政は嚴遂がどうして自分とそれほどまでして深い交わりを結びたがるか理解できなかった。のちに聶政の母親が亡くなった。聶政は葬式、服喪の後で、一下層民の自分に礼を尽くし、母の長寿を大金で祝ってくれた嚴遂こそ自分を本当に理解してくれた人だと感じ入る。国士待遇には国士として報いる。予譲と同じである。聶政は嚴遂に報いるため、俠累を刺殺する。聶政は身元がわれたら依頼者や姉が迷惑するだろうと「自分の面皮を剥ぎ、眼をえぐりぬいて面相がわからないようにし」そのうえで「腹を切って腸を引き出し、その果てに死んだ」。その姉は弟の名を顕彰するために「これは私の弟、軹の深井里の聶政です」と絶叫して屍のもとで自殺する。当時の人々はこのストーリーを聞いて口を揃えて「聶政が立派な人物であるだけでなく彼の姉も烈女だ」と言いあった。

小室氏は「刺客」は「殺し屋」とはちがうと言う。「殺し屋」が「この殺しならいくらで引き受ける」という売買契約によって成立するのに対して、「刺客」はそうではなく「己を知る者^{おのれ}」のために死ぬのであると言う。「幫」なのである。聶政はお金を受け取らなくても結局、韓の首相、俠累を殺した。その理由は事情が変わったからである。事情の変更というのは聶政の老母が亡くなり、後顧の憂いがなくなったことである。

続けて、小室氏は現在の中日ビジネス上の問題点と「聶政」との関係に言及して次のように言う。「日本の商社が辟易するのは、中国人の事情変更の原則の乱用によって、既に存在する契約が否定されることである。資本主義とはちがって、中国では契約は絶対ではないから、このようなことがあり得るのである。／聶政ケースはこの逆だと思ふとよい。存在しなかった契約が存在するようになることもあり得る。これもやはり事情変更の原則の援用例の一つである。」

第一章の末尾に総括して小室氏は次のように述べている。「資本主義とはちがって、中国では契約は絶対ではない。契約の背後にある人間結合の軽重により、契約は軽くもなるし重くもなる。契約が守られるかどうか、どこまで守られるかはその背後の人間結合によってちがってくる。」(p. 90)「刺客列伝」を引用しての見事な中国理解であると思う。つまるところ、中国では誠意という抽象的なものだけではなくその誠意の現れとしての具体的事実が必要だということであろうか。もっとも誰彼かまわず、誠意の押し売りをして意味はない。これはという人間に対してのみ、あらん限り、誠意を具体的事実としてその行動によって示すのである。「幫」の関係こそ、かつて日本人が賞賛したものであったのではないか。そして、今も中国には「幫」の関係が存在するのである。

ニー②第二章 「帮」を取り巻く多重世界

第一章を読むと、そんなに簡単に「帮」内と「帮」外の世界に二分できるのかと疑問に思われるであろうが、第二章では中国における人間関係がより正確には多重世界であることが明らかにされる。関係の薄い、ゆるい結合集団から関係の深い、堅い絆の結合集団へという順序を考えると【他人→知り合い→関係→情誼→帮】という順で同心円の、深い、堅い絆の中心へ進んでいくことになる。⁽²⁾ 情誼と帮のちがいは前者が利害を基礎に置くのに対して、後者は利害を基礎に置かない点にある。

この多重な人間関係に関連して、日本人のビジネスにおける信頼が企業の信頼、企業内の地位の信頼（たとえば「大企業の〇〇だから大丈夫」とか「部長さんがああ言っているのだから信用できる」というような信頼の仕方）であるのに対して、「中国ビジネスにおける信頼とはズバリ、人間と人間とのあいだの信頼なのである」と小室氏は言う。日本人と中国人のビジネス上のトラブルは信頼関係についての誤解（日本人が賄賂をこれだけ使ったのだから信頼関係ができただろうと思っても中国人の方はそんな信頼関係は何もないと思う、というような誤解）に基づくということになる。又、「中国ビジネスマンは「金儲け」と同時に「情誼」という人間結合のために商売をしているのである」という小室氏の見解は引用されている孔健氏（『中国人—The truth of Chinese—』総合法令刊）の「商売は、金と物とのやり取りをすることだけではない。人間と人間との付き合いなのだ、彼らは固く信じている。」「彼らは金だけを追求する商売を軽視する。／商売を通じて、豊かな人間関係が成立しないと、満足しないのである。」という考えと符合する。中国人とは、元来、人と人との関係性を重んじ、それを豊かなものにし、楽しむ人たちなのである。

ニー③第三章 中国共同体のタテ糸「宗族」

この章ではヨコの共同体たる「帮」に対して、タテの共同体としての「宗族」^{そうぞく}について述べられている。「宗族」とは「父と子という関係を基にした」「姓を有する父系集団（patri-lineal group）」であり「同一宗族の中では絶対に結婚できない（＝「部外婚制」（exogamy））」⁽³⁾。同一姓であっても同一宗族（のメンバー）でなければ結婚してもよい（p.144）。又、それに関連して日本人の苗字は場（field）であるから、状況によって変わりうるが、中国人の姓は属性（ascription）であるから変更不可能であると小室氏は指摘している。

更に小室氏は日本の同族会社が婿養子システムをバネとして漸次、同族的でなくなっていくのに対して、中国の同族会社は婿養子システムをとらないため何代たっても同族会社であることを指摘する。（これは従来の日中比較文化論でもよく指摘されていたことで

ある。) 又、日本の会社が先ほどの三つの特徴を持っているという意味で共同体であるのに対して、中国の会社は共同体ではないと言う。中国の会社が共同体になることはない。なぜなら「中国には血縁共同体、宗族が存在するから」であると小室氏は言う。

ニ④第四章 中国人意識の源流に韓非子あり

この章では韓非子の思想、すなわち法家の思想について言及している。「法」とは「法律を作ること」、「術」とは「法を施行するための役人の操縦法」であり、これが「法家の思想」である。小室氏は儒教が「道德第一、次が経済、そして軍備」という優先順位であるのに対して、法家の思想は「経済第一、次が軍備、そして倫理道德」という順であると言う。

更に、小室氏は中国の「法」と欧米の近代法の考え方の違いについて言及する。小室氏は言う。「根本的に言う中国には主権という概念がない。」つまり自分の領域内でなら自由に何をやってもいい主権者(という怪物^{リグファイアサン})から何とか自分の権利を守るのが近代リベラル・デモクラシーの出発点であり、その発祥地英国では1688年の名誉革命、1689年の権利宣言で王は最高であるが、しかし「王は法の下にあり」と謳いあげた。「この法律とは人民を主権から守るもの、というのが近代法の根本的な考え方」なのである。「法律というのは政治権力から国民の権利を守るものである」という考え方である。ところが「このような精神がまったく欠落しているのが法家の思想」、「中国の法概念」であり中国において「法律はつまり為政者、権力者のもの」なのだと小室氏は言う。そして「法律の解釈はすべて役人がにぎっている」ところに中国とのビジネスの難しさがある。更に近代(欧米)法の中心は民法であるのに対して、中国法の中心は刑法であることを小室氏は指摘しているが、これは従来の日中比較文化論でもよく言われていることである。こうして見てくると何か中国が悪で劣っているように見えてくるが小室氏の優れたところは、物事を一面からしか見ない、すぐ善悪のレッテルを貼りたがる日本人的(そしてその温床となっている日本のマスコミ的)視点から自由なことである。

そもそも権利・義務・所有などの基礎概念がすべて二分法的であるのと同様、資本主義の特徴は「ある」のか「ない」のかどちらか一方が、一方だけが成立する二分法的なことだが、それは「歴史上ユニークなもの」でいつ、どこでも発見できるものではないと小室氏は言う。(たとえば占有と所有を混同することなどよくあることだと言う。) 続けて次のように言う。「資本主義の企業は、資本主義的規範、諸ルールをあたかも当然のごとく心得ている。自然法のごとくに思い込んでいる。古今東西を通じて変わるものがない「不磨の大典」視しきっている。すべての誤りはここに発する。／中国経済の将来について

て問われたとき、資本主義のエコノミストは答えて言う。「中国が世界のルールを受け入れることができるかどうかにかかっている」と。／これそも何の言ぞや。／資本主義の「ルール」をあたかも古今東西を貫く天の理と信じ切っているのではないか。それであればこそ、中国人のルール、中国人の基本的行動様式が、何ともいえないほど奇妙奇天烈なものに見えてしまう。／お互いのルールを学びあうというのではなく、「中国のルールは間違っているから、早く世界のルールに合わせないと中国の経済発展は覚束ない」などと言う。これこそ、中国人がもっとも嫌う態度ではないか。こんなことでは、いくら中国人とコミュニケーションしたくても、中国人が身を入れてこないのは当たり前。／中国へ進出する資本主義の人々は「資本主義のルールは歴史上ユニークなものである」「有史上特殊なものである」ことをまず認識、体感しなければならない。」(p. 217) どんな場合にも見下したような態度や押しつけは通用しないのである。これからの日本人が他国の人々とつきあっていく上で気をつけなければならない点であろう。

ニー⑤第五章 中国の最高聖典、それが「歴史」

この章で小室氏は「中国史を貫く社会法則は不変である」と考えるべきだとしている。確かに、中国の人と話していると、毛沢東は『三国志』や『水滸伝』を熟読して戦略を考えたとか、中国の指導者はいつも歴史の中から知恵を得ているといった話を聞く。事の真偽はともかく、歴史を重んじているのは事実であろう。日本のように「水に流す」ことを良しとする考えとは違う。「お互いの違いを理解する」と口では言うが、具体的事実に即して発言する人（さらにはその中の普遍性と個別性をバランスよく見極める人）はまだまだ少ない。新しい、感覚の鋭い比較文化論の研究者の出現が待たれるゆえんである。

ニー⑥第六章 中国市場経済はどうなっているか

この章では「中国には資本主義的契約はなし」と言うべきであり、「中国では契約は交渉の始まり」であり、これからいっしょに仕事をしましょうという意志表示なのでであると小室氏は言う。更に「中国に絶対神はいない。」「人間関係がすべてである。」と言う。そして結びとして「中国の法律は未だ人民を保護する役目をはたしていないのである」としている。

ニー⑦ まとめ

以上、各章別に内容を見てきたが、大筋、同意しても少し気になることがある。それは実際に中国人に聞いてみると「幫」というのはどうやら日本語の「徒党を組む」の「徒党」

に近いということであり（たとえば“四人帮”＝「四人の徒党」＝「四人組」）、更に「宗族」については、農村部では小室氏の言うように強い影響力を持っているが、都市部では「宗族」必ずしも中心的な力を持っているのではないということである。「帮」も「宗族」も比喩的な意味でとらえた方がいいのではないだろうか。「帮」というのは人間的絆の重要性を言っているのであり、「宗族」とは血縁の重視であろう。中国の法についての考え方は韓非子、法家のそれであり、欧米近代法のそれとは全然、異なることを認識しておく必要はあるだろうが、中国も法の整備をし、世界化していつている面もあるのであるから固定観念を持たず流動的に見守っていく必要もあるのではないだろうか。

本書を読むことによって今まで、日本人の中国理解が部分的で曖昧なものであったことがよく理解できるであろう。筆者はかつて大学の一般教養課程で中国語を教えていたときに筆者から中国語を習っている日本人学習者に中国のイメージ、中国について思うことを自由に書いてもらったことがある。その結果、①神秘的な国②人口が多く土地が広いから21世紀は中国の時代だ③中国には経済発展しても、日本のように精神性のない国になってももらいたくない、といった意見が大多数を占めた。①②などの意見が多いのは中国のことがよくわかっていないからである。翻って私自身はどうだろうかと反問してみると、私自身も部分的な面（例えば中国語文法とか現代中国文学とか日中比較文学とか）以外、全体として中国とはこういう国で中国の人とはこうした人たちだということはよくわかっていなかったのではないと思う。それは受けた教育の偏向によるのかもしれない。（それは他の外国語及び外国研究についても言えることではないだろうか。）私が双方向の日中比較文化論の重要性を強調する背景の一つにはこうした過去の研究への反省もあるのである。

本書の書評、紹介が日本人の中国理解に資するところがあれば幸いである。次の機会には論文の形で中国人の日本理解について言及したいと思う。

【注】

- (1) 平成9年5月1日現在、日本にいる中国人留学生数は22,323人（全体の留学生数は51,047人）である。留学交流事務研究会編著（平成10年）『留学交流執務ハンドブック』第一法規 p.19
- (2) p.137 図参照（右図）

